

2021年5月2日 久宝教会 復活節第5主日礼拝

メッセージ「キリスト教からイエスの道へ」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネによる福音書 14章 1-14節

昨年に引き続き、新型コロナウイルスの感染拡大による「緊急事態宣言」下で迎える2回目のゴールデンウィークとなりました。特に感染者が多い大阪府では、既に医療機関がパンクしていて、医療現場が逼迫、崩壊していると言われています。入院できず自宅で待機している人も何千人といて、発熱しても保健所には電話が通じないとも言われています。今、私たちに出来ることは、とにかく感染しないように、また感染させないように予防すること、そのために外出や集会、会食などを控えることなど、昨年から行って来ていることを、更に継続していくことしかないのかと思われています。

先月には私たちの教会でも、年に一度の定期教会総会が開催されました。昨年に引き続き、書面での開催となりましたが、そのために改めて昨年、2020年度を振り返り、また今後についても考えてみる機会が与えられました。久宝まぶね保育園の旧園舎からの移転に伴い、2008年6月から柏原市にある敬老ホーム「大阪好意の庭」にて、私たちの教会は礼拝を行って来ていました。そこから、12年ぶりにこの八尾市久宝寺の地に戻って来て、こども園の新しい園舎と共に、教会も新しくなりました。そのように思っていたら、教会の引っ越しと時期を合わせて、コロナ禍のために皆がなかなか集まるが出来なくなりました。献堂礼拝も春から延期に延期を重ねて、11月に行われた程でした。「教会(エクレシア)」という言葉は、元々のギリシア語の意味からすると「呼び集められた人たちの集まり」であり、むしろ「集会」と訳す方がふさわしい言葉です。人と人が集まる所が「集会」であり、「教会」であると思って来ましたが、そんな当たり前と思ってきたことから、見直しを迫られた1年間でした。

日本キリスト教団出版局から発行されている『信徒の友』という月刊誌があります。毎月、表紙をめくるとすぐに「献堂しました」という新しく教会堂が献堂された教会の紹介記事が、写真入りで掲載されています。そのページの端に「最近完成した会堂の写真をお送り下さい」と書かれていますので、私たちも教会の外観と

内部の写真を編集部に送りました。すると編集部から「礼拝堂の写真がないようなので、礼拝堂の写真を送ってください」との連絡を頂きました。私は「先日お送りした部屋が礼拝堂で、そこで毎週礼拝をしています」と答えましたが、確かに、机と椅子、ピアノがあるだけでは、ただの集会室と思われたのかもしれませんが。

教会の「礼拝堂」と言うと、正面の上の方に大きな十字架があって、講壇・説教壇や祭壇があるというのが、多くの方の想像する礼拝堂かと思います。しかし、歴史を遡って、紀元 1 世紀や 2 世紀の頃の、最初期の教会はどうかと言うと、もちろん豪華な礼拝堂があるわけもなく、人々は仲間の家に集まって礼拝をしていました。日曜日に仲間たちが集まって、一緒に賛美の歌を歌い、聖書を読み、イエス様の物語、記憶・思い出を語り合い、持ち寄った食事を分け合って、心も体もいたわり合い、励まし合っていた。それが最初期の集会・教会だったわけです（ユスティノス『第一護教論』65-67 章）。

「神様はどこにいるの?」と聞くと、世界中で、大半の人が前方の上の方を向くそうです。ですから教会でもお寺や神社でも、前方斜め上に十字架や仏像、ご神体などの聖なる物が掲げられているのだと思いますが、しかし、本当にそうでしょうか。イエス様は、「神様は説教壇や祭壇の向こうにいますよ」とは言われませんでした。むしろ、ヘブライ語聖書に書かれていた「神殿の奥深くにある祭壇に神様は現れる。だから、神様に献げ物をして、赦しや祝福を得るには神殿に詣でなければならない」というユダヤ教の教えに対して、「そんなはずはない」と言い、自らも人間として生まれて、人々の間に生きられたのがイエス様でした。「神様はいつでもどこでも私たちと共にいる」それが、イエス様がその言葉と行動で伝えられたメッセージだったのだと思います。

今日はユーカリスト(聖餐)がありますので、ここに、私たちの輪の中に、パンとぶどうジュースも置かれています。それはそこに、礼拝の中心があると考えているからです。礼拝の中心は、「見える御言葉」としてのイエス・キリストの体であるパンとぶどう酒の分かち合いと、「見えない御言葉」としてのイエス・キリストの思い出、物語の分かち合いです。文字に書かれ、翻訳されたこの聖書が御言葉なのでも、お説教が御言葉なのでもなく、人間として生まれ、人々の間を歩まれ、そして今も生きておられるイエス・キリスト自身が御言葉だというわけです。

私たちは、教会の活動として「宣教」や「伝道」について考える時、それをどのようなものとして考えているでしょうか。日本語では「教^のえを宣^のべる」と書いて「宣教」、「道^のを伝える」と書いて「伝道」と言いますが、その中身は聖書の知識やキリスト教の知識を伝えることになってしまっているのではないかと反省します。しかし、イエス様はそのようなことは一切されませんでした。

今回の聖書のお話は、イエス様が逮捕され十字架につけられる前に、弟子たちとの最後の食事、「最後の晩餐」の席で、弟子たちに話された話の一部分です。イエス様は弟子たちに「もうすぐ自分はここからいなくなります」という話をしています。1節から「心を騒がせてはならない。神を信じ、また私を信じなさい。私の父の家には住まいがたくさんある。もしなければ」とか、「あなたがたのために場所を用意する」とか、分かりにくい表現が続いていますが、要するに「神様の下に、あなたがたの居場所がある。だから安心していなさい」ということかと思います。

続いて4節では、イエス様は「私がどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている」と言われました。しかし、弟子の一人であるトマスは言い返しました。「主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません。どうして、その道が分かるでしょう」。彼らにしてみると、「どこへ行ったらいいのですか、そんな道は知りません」ということで、不安になったのだと思います。それに対してイエス様は言われました。6節です。「私は道であり、真理であり、命である。私を通らなければ、誰も父のもとに行くことができない」……。

「道^{みち}」とは人々が通るものであり、その上を歩むものです。この言葉は、一見すると、「キリスト教を信じなければ、天国には行けませんよ」という意味であるかのように受け取られるかもしれませんが、日本語でも「道(みち・どう)」という言葉には、「生き方」や「あり方」という意味があるように、ここで言われている「道^{みち}」もまた、そのようにイエス様はその身をもって示された生き方、あり方のことを指していると考えられます。ですから、ここでイエス様が言われているのは、言い換えるならば「私^があなたがたと共に歩いて来たように、あなたがたはこれからも歩いて行きなさい。そこに命をもたらす真実があります。」そして「そのようにして、あなたがたは私を知ったのだから、当然、私の父のことも知るでしょう。いや、すでに知っていますよ」

ということでした。

この後は、「私たちに御父をお示し下さい」(8)というフィリポに対して、「私を見た者は、父を見たのだ」(9)とされていますが、ここで言われている「父」とは、ユダヤ教・ヘブライ語聖書で考えられていた通り、この世界、全ての命の創り主であり、目で見ることの出来ない神様のことでした。そして、そのような神様が、私たちと同じ人間、目に見える存在となって、互いに会話が出来て、頭で理解することが出来る存在になった、それが言葉(ロゴス)となった御子イエス・キリストでした。

そのイエス様が、「私が父の内におり、父が私の内におられ、これまでの業を行っておられたように、あなたがたも、私の道を歩みなさい」と言われました。それは「ユダヤ教からキリスト教に改宗しなさい」ということではなく、ただ「これまでイエス様が共にいて歩いて来られたように、あなたがたはこれからも歩いて行きなさい」ということでした。

キリスト教の「宣教」や「伝道」が、宗教としてのキリスト教や聖書の知識を伝えて、理解させ、信徒にすることや、改宗させることであれば、それは小さい子どもたちや、認知症や様々な障がいや病気をお持ちの方々を対象外としてしまいます。しかし、「私を通りなさい」と言われるイエス様の道は、そのような方々も含めて、全ての人々に開かれているはずで。

新しい礼拝堂建築に際して、講壇や祭壇を設けず、聖書と共同の食卓(パンとぶどう酒)を中心に置いた私たちは「二人、または三人が私の名によって集まる所には、私もその中にあるのである」(マタイ 18:20)というイエス様の言葉を心に留めて来ました。しかし、コロナ禍の中、昨年からの二人、三人ですら、一つの所に、共に集まるのが難しくなってきました。……しかし、たとえこの礼拝が、インターネットを介したオンラインの集いや、交わり会あっても、またそれも出来ず、場所も時間も共に出来なかったとしても、だからといって神様の働きが、異なるわけではありません。イエス様がその言葉と振る舞いで示されたように、神様は全ての人と共におられて、今も働かれておられます。そのために、私たちもまた、たとえ場所も時間も離れていたとしても、イエス様の道を共に歩む者であることに変わりはありません。ですから、私たちは今日もここから、神様が全ての人と共におられるということを証ししていく者として、用いられて行きます。